

藤女子大学 図書館 だより



Fuji Women's
University Library

「児童英語教育」における コミュニケーション教育

英語文化学科 大石 悦子

1. 英語文化学科における児童英語教育への取り組み

小学校5・6年生の「外国語活動（英語）」の授業の必修化を受けて、2012年4月より英語文化学科において、児童英語教育に関する取り組みが始まりました。具体的には大学近くの「幌北小学校」の5・6年生の授業にボランティアとして加わり、授業の活動に加わったり、実際に教案を立て、授業を行ったりしています。さらに後期からは、外国語活動のボランティアを行う小学校が増える予定です。また、このようなボランティア活動に積極的に関わられるように「児童英語セミナー」を開催し、学生達は児童英語教育に必要な基礎知識や絵本、歌・チャンツ、ゲーム、フォニックスなどを使った英語活動について学んでいます（詳しくは学科ホームページ参照 <http://www.fujijoshi.ac.jp/news/english/?cat=10>）。2012年前期は計11回の児童英語セミナーを行い、後期にも同様のセミナーを計画しています。

2. 「外国語活動（英語）」の「活動」とは？

「外国語活動」の授業を必修にすることに賛否があるのは確かで、小学校5・6年生という母語習得の大切な時期に、外国語教育、それも使う機会が日常的にあまりない言語の教育を導入することに懐疑的な教育者や研究者がいるのも確かです。しかし、隣の家に住む人や会社の同僚が違う文化圏出身の人であったり、出張先としてアジア、ヨーロッパ、北米などに行く人が特殊な職業の人ではなくなったりしている現在（そしてこの傾向はどんどん加速していくことを考えると）、「外国語活動」の授業を通して、違う言語や文化に積極的に関わる態度を小学生のうちから身につけさせたいという文部科学省やこの授業の設置や必修化に関わった人たちの意図は十分理解できます。

授業名である「外国語活動」が示すように、これは中学

CONTENTS

1. 「児童英語教育」における
コミュニケーション教育 大石 悦子
4. 教員著作紹介
6. 高校生の大学図書館就業体験
7. 図書館委員会からのお知らせ
7. 人事異動のお知らせ
8. 図書館員のオススメ本 第13回

No.84
2012.10

校に入ってから導入されていた「英語」教育の時期を早め、小学校から始める「英語」の授業を指すものではありません。中学や高校などで行われる「理解」や「分析」に基づいた「英語教育」や「異文化教育」と違って、言語や文化の「理解」や「分析」を前提とせず、言語や異文化体験を行わせようというものです。つまり、英語の文構造を理解してから文を作ってみるとか、法則を理解してから計算してみるという学習の仕方と違って、跳び箱を跳んでいる先生や友達のまねをする中で跳び箱が跳べるようになったり、まねして歌っているうちに歌が歌えるようになったりするような学び方を想定しています。しかし、実際に跳び箱がある「体育」の授業や歌詞やリズムを聴ける「音楽」の授業と違って、知らない言語や文化を「体験する」ということがどのように可能かという疑問が出るのも当然です（歌詞の「音」に関して言うと、人がそれぞれの声で歌っても、同じ「音」と認定するのですから、音は実際にはかなり抽象的なものなのですが）。



文部科学省が出している「外国語活動」の教材である「Hi, friends!」を見る限り、現在の「外国語活動」の授業は、例えば、「感情を表現する」「できること（スポーツなど）を説明する」「人に道順を説明する」のような活動が英語で行われているものをモデルに、児童たちが自分の感情を表現する、自分で道案内をしてみる、つまり、「英語を使う」体験をさせることに主眼を置いているようです。この活動の過程で、児童たちは感情を表す英単語、スポーツの英語名、道順を説明するために必要な英語表現などを学んでいきます。実際、10歳から12歳くらいの児童は英語の活動モデルに驚くほどの柔軟性を持って反応し、自分の知っている世界の事物とそれを表す英単語を驚くほどのスピードで結びつけ

ていきます。また、“Nice to meet you”（「お会いできて嬉しいです」）と“Nice to meet you, too”（「私もお会いできて嬉しいです」）のような日本語では通常しないような挨拶のやり取りも、全く気後れすることなく行います。この意味では、「外国語活動」は英語を使う授業、異文化を体験させる授業になっていると言えるでしょう。しかし、違う文化圏の人々が普通に行き来し、言語を使って経験を共有していく時代のコミュニケーションの導入として「外国語活動」を考えると、今後の課題はあり、以下のような教材と活動を導入する必要があると思われます。

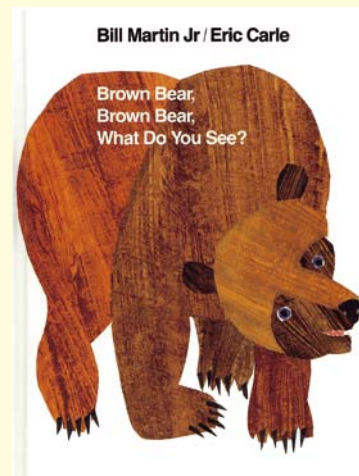
3. 絵本、チャンツで学ぶコミュニケーション

子どもに外国語を教えるときによく使われるものに、絵本、チャンツがあります。これらが使われる理由として、子どもは親しみのある動物や人やものの絵が入っている絵本が好きだからとか、チャンツによって音に親しむからなどと説明されたりしますが、それ以上の意味があるように思われます。簡単に言うとこれらにはコミュニケーションの「展開」があり、その「展開」のかなり多くが言語や文化に特有なものだからです。

例えば、第2回、第7回「児童英語セミナー」で使われた絵本、*Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*（『茶色グマ、茶色グマ、君には何が見えるの?』）では、この文で始まる言葉の掛け合いで、話が展開していきます。茶色グマは“I see a red bird looking at me”（「僕には僕を見ている赤い鳥が見えるよ」）と答え、さらに赤い鳥への呼びかけが以下のようになります：

“Red Bird, Red Bird, what do you see?”（「赤い鳥、赤い鳥、あなたには何が見えるの?」）。それに対して赤い鳥は“I see a yellow duck looking at me”（「私には私を見ている黄色いアヒルが見えるわ」）と答え、同じパターンが最後まで続きます。

子ども達はこの絵本を読んでもらいながら、最も



基本的な英語コミュニケーションのやり取りのパターンを「観察」していきます。“Brown Bear, Brown Bear”と呼びかけて、相手を“you”で指し、“what do you ~?”を使って、「何」と問いかけの中で、相手をコミュニケーションに誘っていく。呼びかけられた方は自分を“I”で指し、「何」と問われたものが“a red bird looking at me”や“a yellow duck looking at me”であると「答える」中で、相手のコミュニケーションの誘いかけに応じていく。絵本では、次のページに「答え」である（著者 Eric Carle の絵本の特徴である）色鮮やかな赤い鳥、黄色いアヒルが現れます。

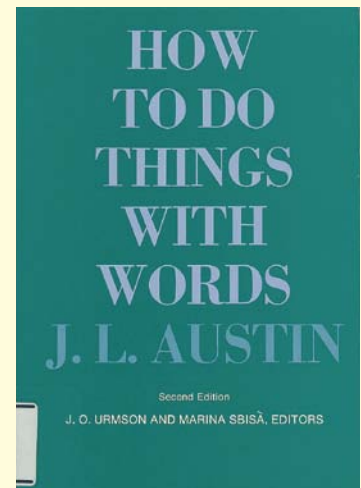
また、第9回「児童英語セミナー」で使われた“Who is Sylvia?”というチャンツでは、“Who has a name that starts with S?”（「Sで始まる名前を持っているのはだれ？」）という呼びかけから始まります。その呼びかけに対して、Sで始まる名前を持っている子どもは“I do”（「私よ」）と答え、周りの子ども達は“She does”（「彼女だよ」）と応じます。さらに最初の質問者が“What’s her name?”と質問し、周りの子ども達は“Sylvia”（「彼女はシルビアだよ」）と答えます。この後は、違うアルファベットに入れ替えたものや、“Who has a name that ends with E?”（「Eで終わる名前を持っているのはだれ？」）や“Who has a name with an A in the middle?”（「Aが真ん中にある名前を持っているのはだれ？」）という異なった呼びかけがなされ、違う子どもが“I do”（「私よ／僕だよ」）と答えて、“S/he does”、“What’s her/his name?”、“...”という同じ流れが続いていきます。

ここでもやはり子ども達は英語コミュニケーションの基本的なやり取りのパターンを、特に複数の参加者がいる時のやり取りのパターンを、「体験」していきます。最初の話者が“Who has ...?”の構文を使って、「誰」と問うなかで、コミュニケーションの誘いかけをし、次の発話者を選んでいきます。“...”の名を持つ次の話者は、自分を“I”で指し示し、問われた「誰？」が自分であると（“I do”）答えることによって、コミュニケーションの誘いかけをした最初の話者“you”に応じていきます。他の参加者は“I do”と答えた2番目の話者を（自分たちでも、質問者でもないの）“she”で指し、「誰」という問いをした最初の話者“you”に対し、“She does”と答えることによってコミュニケーションの誘いかけに応じていきます。それに対し最初の質問者が「何？」とい

う更なる問いを発し、それに対し“she does”と答えた複数の参加者は“Sylvia”と答え、最初の質問者に応じます。ここでは、(i)「誰」という問い、(ii)自分であるという「答え」、(iii)「答え」の客観的認定、(iv)「何」という更なる問い、(v)その答えの提示、という非常に英語らしいコミュニケーション展開のパターン、さらに話の展開のパターンが、“I”, “you”, “she”という一人称、二人称、三人称という視点の広がりの中で、具体的に現れます。

もちろん、チャンツで掛け合いをしている子ども達はこの英語のコミュニケーションの世界を「理解」している訳ではありません。このようなコミュニケーション分析には、言語行為理論（J. L. Austin, *How to Do Things with Words*）やその他の理論に基づいた語用論や、発話の連続性に関する最近の談話分析の理論（例えば、A. Fetzer (ed.), *Rethinking Sequentiality*）などが必要です。しかし「理解」しなくても、こういった活動を繰り返すことによって、子ども達は「問い」と「答え」を軸に、人称性を媒介にして人と関わっていくというコミュニケーションの仕方を普通のことと見なすでしょう。これが英語の特徴だとか、日本語と違うなどということはあまり意識せず。この経験が「違う言語や文化に積極的に関わる態度を身につける」いいベースになるでしょうし、外国語を学ぶということはその言語特有のコミュニケーションの仕方、つまり、人との関わり方や事態の認識を共有する仕方を学ぶことであるということが理解された時、「外国語活動」の授業も次の段階を迎えるのだと思います。

コミュニケーションの理解を深めることを通して、私たち研究者ができる「外国語活動」に対する貢献があり、コミュニケーション理論を大学の授業で学んだり、留学などの経験を通して実際に理解したりした学生達ができる「外国語活動」に対する貢献、または他の分野における貢献があると思います。



教員著作紹介

今号から教員著作物を紹介することになりました。今回は、2012年1月～7月に発行されたもので、本学に所蔵のあるものの紹介です。先生方に自著紹介をしていただきました。

図書館には、本館・花川館それぞれに教員著作コーナーがあり、所属学部の先生の著作がまとめてあります。今回紹介した本はもちろんですが、他にも著作物があります。貸出出来るので研究内容を知る機会に、ぜひご覧ください。



『折れた弓： シェイクスピア「ヘンリー 6世」3部作の起源』 平松 哲司著

亜理西社発行，2012年4月17日
所蔵館：両館所蔵

英語文化学科
平松 哲司

新刊の本には、たいてい帯に広告のキャッチ・コピーが入ります。編集者の最初の紹介文には「渾身の力作」の言葉が入っていました。これはいかになんでも気恥ずかしいので、結局「異色の論考」に落ち着きました。

「異色」がこの本に似つかわしいなら、テキスト批評、演劇的アプローチ、そして文学批評の要素を兼ね備えているからです。複眼的視線で見ないかぎり、「ヘンリー6世3部作」に私が興味を持った理由がすくいとれません。

この作品はシェイクスピアがロンドン演劇界にデビューした処女作です。3部作という、ほかにあまり例のないスケールの大きい作品を、地方の中等教育しか受けていない、それまで全く無名であった男が（多分役者としてなんとか食いついでいたと想像されます）、どうやって構想し、書き上げたか、そこを知りたかったのです。



『泉鏡花論 到来する「魔」』 種田和加子著

立教大学出版会発行，
2012年3月30日
所蔵館：両館所蔵

日本語・日本文学科
種田和加子

本書は、わたくしが、約30年間泉鏡花について書き溜めた論文のなかから、まずまず単行本収録に耐えるものを選び、形にしたものである。そういういかにも集大成のように聞こえるが、自分としては「集中成」くらいの気持ちである。書きたいことはまだまだある。第一部は「子供」をめぐる論考、第二部は「近代」がはらむ諸問題に直結する論を提示、第三部は衣装や役者の文様など鏡花の「表層」の描き方を近代文学とし位置づけることを試みた。すべてこれらのテーマは「差異と反復」の運動性をもつため、複数のテーマが多層的にからまって織りなされる鏡花文学の特質に迫ったつもりではある。講義やゼミを通して、学生との応答によって得たものも反映されていることを申し添えておきたい。



新注和歌文学叢書11 『御裳濯河歌合 宮河歌合 新注』 平田 英夫著

青簡舎発行，2012年3月31日
所蔵館：本館

日本語・日本文学科
平田 英夫

平安時代末期に活躍した僧侶歌人、西行（1118年生～1190年没）が、その晩年期に自身の作歌活動のまとめとして、それまで詠んできた多くの詠作の中から秀歌を選び、それを歌合の形式に編集して伊勢神宮の内宮（『御裳濯河歌合』）と外宮（『宮河歌合』）にそれぞれ奉納した作品集に注釈を施した書である。本歌合は、和歌文学史において藤原定家とならび重要歌人として知られる西行の秀歌撰としての性格のみならず、日本中世における宗教文芸としての性質も持ち合わせており、自然物を宗教的イメージを持って表現する西行和歌の特徴を見るうえでも貴重な作品となっている。最新の西行研究の成果を交えながら詳細な注釈と歌の背景の解説を試みた。



『かぐや姫は、 じつは貨幣である』 大竹 慎一、丸山 隆司著

491 アヴァン札幌発行，
2012年3月11日
所蔵館：本館

日本語・日本文学科
丸山 隆司

大竹慎一氏は、大学時代からの友人である。現在はニューヨークに在住、ファンド・マネージャーであり、Ohtake, Urizar & Co を経営している。彼は、毎年日本を縦断し、上場企業だけではなく、地方の企業の経営状況を自ら確かめて、投資家に情報を提供している。彼は、毎年、夏に北海道へやってくる。その時に、『竹取物語』をめぐって対談したものである。

「かぐや姫は貨幣である」とは、私が、長年文学史を担当し、『竹取物語』を読んできた〈よみ〉である（本のタイトルに「じつは」を入れようというアイディアは大竹氏のもの）。貨幣についてお金の専門家である大竹氏と議論できたのは有意義なことだった。この対談を生かして、今度は『竹取物語』論を書いてみたい。

『春雨物語』

三弥井古典文庫
井上泰至、一戸渉、三浦一朗、山本綏子編



三弥井古典文庫

『はまなす×いそこもりぐも @石狩浜』

阿部包監修

人間生活学
阿部 包

日本語・日本文学科
山本 綏子

活字で読んでいると忘れがちですが、日本古典文学は和本などの古い形態で残されています。和本には、出版された板本と、人の手によって書かれた写本とがあります。上田秋成の代表作『雨月物語』は板本、『春雨物語』は写本です。特に『春雨』には、収録作品や本文がかなり異なる、数種の写本があります。従来の『春雨』注釈書では、複数の写本を混ぜ合わせて本文を作り上げてきました。読みやすいという利点がある一方、本来の姿を崩してしまっているという問題もあります。そこで、近年再評価されている文化五年本という写本のみを底本とする注釈書を作りました。本書をきっかけに、『春雨』に触れてもらったり、『春雨』研究の新たな地平が切り拓かれたりすることを願っています。



平成23年度 老人保健事業推進費等補助金
老人保健健康増進等事業

『地域包括ケアの実現に向けた生活圏域単位での社会資源情報の可視化に関する調査研究事業報告書』

藤女子大学発行、2012年3月
所蔵館：花川館

人間生活学

小沼 春日

日本においては、地域包括ケアを推進する際に、生活圏域単位でフォーマル・サービスとインフォーマル・サポートとが連動することが大いに期待されているが、それらの社会資源配置が地域特性によって大きく異なっているのが現状である。そのため、地域特性を把握する標準的なアセスメント手法を確立していくことが急務であるが、多くの問題を内包し実現できていない。以上の問題意識から、本書はこれらの対応策について検討・提案を行うために、北海道内の福祉関係機関に対する実態調査（アンケート、訪問ヒアリング調査）等を踏まえ、地域の社会資源情報の可視化・活用のあり方に関して課題を整理し、解決策を提言したものである。



『どの本読もうかな 355冊の絵本：読み聞かせ絵本の手引き』

札幌えほん研究会発行、2012年3月25日
所蔵館：花川館

保育学科
柴村 紀代



『はまなす×いそこもりぐも @石狩浜』

藤女子大学
人間生活学
阿部 包

人間生活学
阿部 包

本書は、人間生活学公開講座シリーズの第1弾、去る4月の発行です。花川キャンパスでは藤花祭協賛の公開講座を実施していますが、2010年からのテーマは「石狩の魅力を探る」です。本書は、2011年のシンポジウムを基に書籍化したもので、石狩海岸の自然を扱っています。執筆者は、シンポジウムのパネリスト三名（松島肇、工藤義衛、石山優子）のほか、行政の立場から内藤華子、学部から乗木新一郎の各氏（敬称略）で、石狩浜の貴重な自然や歴史を多角的に解説し、その保全と活用のあり方を紹介しています。わたしは巻頭の序を担当しました。今後続刊も予定されています。本書によって学生の皆さんに石狩への関心が生まれるよう願っています。

保育学科
川原 功司

本書は、2011年10月8日に実施した藤女子大学人間生活学公開講座「石狩の魅力を掘り起こす（石狩浜）」を下敷きにし、六耀社から出版されたものです。この一連の企画は、「イッカルンクル（アイヌ語で「石狩の人」という意味）」という名称でシリーズ化され、来年度以降（今回は「石狩の食」がテーマ）も順次出版していく予定です。本書は、序文、石狩浜の歴史、生態基盤、写真、環境保護、海底堆積物の分析、座談会、コラム、あとがきという構成になっており、気軽に読める読み物であることを目指しています。今後も、石狩にある大学・学部として、学生の皆さんの協力を得て、意外と知られていない石狩の魅力を掘り起こしていこうと思っています。

*人間生活学公開講座シリーズとして出版された本です。人間生活学部の異なる学科の先生に紹介文を寄稿いただきました。今後も刊行が予定されています。

このテキストは、幼稚園や保育園、図書館などで子どもに絵本の読み聞かせをする際、季節や行事に合わせてどんな絵本があるか、月別に紹介したものです。その他、日本と外国の創作絵本、民話絵本、科学絵本などテーマ別もふくめ21種類・355冊の表紙写真と簡単な紹介をしています。制作は私が26年間関わってきた「札幌えほん研究会」で、これまでに「赤ちゃん絵本226冊」「126人の絵本画家・絵本総リスト」などを手がけ、これが5冊目の冊子です。1994年に一度「読み聞かせ絵本の手引 332冊の絵本」を出した後、ようやく改訂版を出しました。年々、絵本を知らない学生が増えているのを感じます。このテキストを卒業後も有効に使ってほしいと願っています。



● ● 高校生の大学図書館就業体験 ● ●

2012年6月25日～29日の間、北海道高等聾学校の3年生Mさんが「就業体験」を行いました。

図書館で行われている仕事を説明し、実際に貸出、返却業務、図書の装備や蔵書点検（所蔵本がきちんとあるかチェック）などを体験してもらいました。

そのほか、展示本を選び、ポップを作りコメントをつけてもらいました。この展示は、大学生にも興味を持ってもらえたようです。手作りのポップは本館に保存していますので、ご覧ください。

就業体験をしたMさんに感想を書いていただきました。

6月25日～29日までの一週間、大学図書館で図書館司書の仕事をさせていただきました。いろいろな仕事を体験しました。主な仕事はカウンター業務で本の貸し出しと返却の仕事や、蔵書点検作業などをしました。その中で、もっとも働きがいがあったのは蔵書点検作業です。36万冊もの本を紛失していないか、バーコードリーダーで調べる仕事です。たくさんの本の点検作業は大変でしたが、終了した際、とても達成感がありました。難しかった仕事は、カウンター業務でした。理由は、

返却した本を元の場所に返すときに、本のラベルに書いてある数字を目印に探します。その時に本がたくさんあるので、本を元の場所に返すのに苦労したからです。ほとんど、体を使う仕事が多かったですが楽しかったです。それに仕事をするたびに、まるで図書館司書になったかのような気分になるので、休みたい気持ちよ

りもっと働きたい気持ちの方が強まりました。

一週間が過ぎる頃、おすすめの本の紹介をお願いされました。6冊選んだうちのほとんどが難聴者関係の本です。ヘレン・

ケラーの伝記や聾の歴史を選びました。皆さんに難聴者のことを知ってもらいたいと思い、選びました。私の選んだおすすめの本を皆さんに読んでもらえるか、どきどきしています。そして、『そして誰もいなくなった』も選びました。私が今まで呼んだミステリーの中でもおもしろいと思った外国ミステリーだったので選びましたので、ぜひ、気が向いたときに読んでください。

最後に図書館の皆さん、一週間、お世話になりました。この一週間、図書館司書についていろいろと学びました。図書館界では、正職員が減少しており、資格を取っても図書館で働ける可能性は低いことを伺いました。それを聞いて不安になりましたが、それでも図書館で働きたいので、司書になるために勉強を頑張りたいと思います。

本当にありがとうございました。



展示本

- 『安倍晴明：陰陽師たちの平安時代』 繁田信一著 148/A12s
『キング牧師の言葉』 キング [述]；コレッタ・スコット・キング編；梶原寿、石井美恵子訳 190.28/Ki43
『ヘレン＝ケラー』 山主敏子著 280.8/Se22/42
『そして誰もいなくなった』 アガサ・クリスティ著；福田逸訳 932.9/C58
『聾の人びとの歴史』 ペール・エリクソン著；中野善達、松藤みどり訳
※378.2/E67
DVD
『ハチミツとクローバー』 高田雅博監督、羽海野チカ原作 e/DV/1419



※❁は花川館所蔵です。

図書館委員会からのお知らせ

・2012年度図書館委員

図書館長

木村 信一（文学部・英語文化学科）

委員・文学部

大石 悦子（英語文化学科）

丸山 隆司（日本語・日本文学科）

杉内 峰彦（文化総合学科）

委員・人間生活学部

船木 幸弘（人間生活学科）

水野 佑亮（食物栄養学科）

吾田富士子（保育学科）

・2012年度図書館委員会として実行すべき課題

1. 図書館中期5ヵ年計画の5年次の活動

2007年度図書館委員会において策定し、2008年度から実施している中期計画の最終年を迎える。目標の達成度を総括するとともに、次年度からの第Ⅱ期中期計画の策定を行う。

2. 大学基準協会大学評価への対応

- ・内容の更新が毎年実施される資料の更新継続
- ・建物及び什器類の経年劣化への対応
- ・収蔵スペースの狭隘化対策
- ・購入希望図書制度の活用

3. 時間外開館と運営体制の検討

4. 学術研究コンテンツの整備・促進の継続

- ・電子化対象紀要類の拡充

5. 学習基本図書の整備の継続

6. 教員と連携した利用者教育の促進

7. シュマウス文庫の整理

8. 学生と協働した活動

- ・学生の企画展示
- ・読書啓蒙活動
- ・学生ボランティアの検討

9. 図書館情報システム更新



人事異動のお知らせ

館長交代 新館長 木村信一（前 内田 博）

五十嵐志穂（システム管理室→目録情報係）

柏木 規子（目録情報係→本館情報サービス係）

川邊 蓉子（本館情報サービス係→花川事務室教務係）

勝見加代子（花川館情報サービス係→本館情報サービス係）

山口恵理子（花川館情報サービス係・採用）

加藤 舞（本館情報サービス係→花川館情報サービス係）

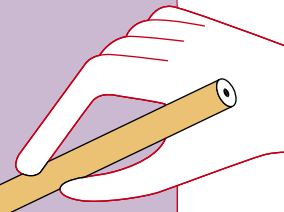


「子どもの頃から読んでいた本」

子どもの頃、読んでいた本を今改めて読んでみると、あの頃とはまた違った楽しみ方ができます。あの頃は、ああいう風感じていたけれど、大人になって読んでみると、そういうことだったのか、と気付かされることもあります。子どもの頃読んでいたシリーズもので、大人になっても続いている本を、今になってからあの頃の自分を懐かしみつつ読むのも楽しいかもしれません。

図書館員の オススメ本

第13回



『へっこきあねさがよめにきて』

大川悦生文・太田大八絵
所蔵館：花川館
請求記号：376.19 / O69

私が物心ついたときに、図書館から何十回と借りて読んでもらい、しまいにはとうとう購入してもらった大のお気に入り絵本です。子どもが大好きなおならの話です。おならで色々な物を飛ばし、時には引き戻して、お嫁に来たあねさが活躍するお話です。方言で書かれており、それがまたお話にいい味を醸し出してくれます。太田大八さんの味のある絵もお話に華を添えます。



『ちいさいおうち』

バージニア・リー・パートン 文・絵；石井桃子訳
所蔵館：花川館
請求記号：376.19 / B94

子どもの頃はさほど気にかけていなかった絵本でしたが、大人になってから書店で見かけ、ついつい購入してしまった絵本です。緑に囲まれた素敵ないわゆる田舎に建てていたはずのちいさいおうちが、年月が経つとともに、周りが騒がしくなってしまう、いつの間にか大都会の真ん中にぽつんと建てています。ちいさいおうちがどうなるのか、このまま、住む人も無く壊されてしまうのかと思ったら、大丈夫。ハッピーエンドが待ち構えていました。バージニア・リー・パートンの絵を、子どもの頃は可愛らしいと思いましたが、大人になるとそれと温かさを感じます。ホッとする一冊です。



『ひとまねござと きいろいぼうし』

H.A.レイ 文・絵；光吉夏弥訳
所蔵館：花川館
請求記号：376.19 / R29

私が小学生低学年の頃、手にした絵本で、絵本にしては少し長いお話ですが、次が気になりあっさりと読めてしまった絵本です。アフリカからきいろいぼうしのおじさんに連れてこられたジョージとおじさんとの馴れ初めのお話です。好奇心旺盛な、おさるのジョージがやらかすいたずらに、周りの大人たちが振り回されるのですが、なぜか憎めないジョージです。近年、このひとまねござるシリーズは、「おさるのジョージ」シリーズとして、新たなお話が出版されています。作者であるH.A.レイ & マーガレット・レイ亡き後も、ジョージが生き生きと描かれています。



『ちいさいモモちゃん』

松谷みよ子
所蔵館：本館
請求記号：913.6 / Ma88

子ども心に初めて、字の多い本、と思い、最初は親に読んでもらい、そのうち一人で読めるようになった本です。ちいさなモモちゃんの日々の成長ぶりが描かれています。当時は当然子ども目線で読みましたが、今は大人目線で読むのも楽しいです。この本は1964年に刊行され、その後、5作の本が刊行され、全6巻として30年近くの年月を経て、「モモちゃんとかかねちゃんの本」シリーズとして完結しました。児童書の中で、“離婚”が出てくる本もモモちゃんシリーズくらいものではないでしょうか。モモちゃんのパパが、お靴だけ家に帰ってくるシーンが、なんだか怖かったのを今でも覚えています。

■ 編集後記 ■

図書館だより第84号をお届けいたします。

巻頭言は大石先生より、「『児童英語教育』におけるコミュニケーション教育」と題してご寄稿いただきました。

そのほか、今号より教員の皆様の著作について紹介させていただくスペースを設けることになりました。先生の紹介文を拝見すると、そのテーマを身近に感じてきませんか？ 教員著作は貸出可能です。紹介文を見て興味が湧いたら、ぜひ手にとってみてくださいね。

この夏、全国各地で猛暑となりました。北海道も暑かったですね。図書館では本館も花川館も書架（本棚）を増設して本の移動作業を行いました。あまりの暑さに連日バテバテでした。来年の夏はもう少し涼しくなるようお願いながらも、雪深い冬がやってくればその暑さが逆に恋しくなるんだらうなあと思う今日この頃です。(K)



図書館キャラクター「きしんさん」

ケータイから
本が探せます！



QRコード

藤女子大学 図書館だより 第84号 2012.10

発行者 藤女子大学図書館

札幌市北区北16条西2丁目

TEL 011-736-5407 FAX 011-709-4770
http://library.fujijoshi.ac.jp/